

令和5年度「少年の主張」全道大会

4年ぶりの実開催！
社会に向けての思いや未来への希望を堂々と発表

1979年（昭和54年）の国際児童年を記念して始まった「少年の主張」全道大会。新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2年度は中止、令和3・4年度はWEB開催だったため、会場での発表は4年ぶりとなりました。今年は道内287校から2万7千人の応募があり、各地区大会を経て、16名が全道大会に進み（当日1名欠席）、厳正な審査の結果、上川地区代表の三浦かなさん（下川町立下川中学校3年）が最優秀賞となり、北海道代表として北海道・東北ブロックに選出されました。



「少年の主張」全道大会
発表者のみなさん

受賞者のみなさん

最優秀賞（北海道知事賞）

三浦かなさん（上川）下川町立下川中学校3年
「恨みを愛へ」

優秀賞（北海道教育委員会教育長賞）

中川 心結さん（札幌）札幌市立宮の丘中学校2年
「自分の心を大切にす ～新自己中のすゝめ～」

奨励賞

※当日発表順
（当日1名欠席）

飯田 冴さん（宗谷） 利尻町立利尻中 3年	唐崎 愛華さん（根室） 標津町立標津中 3年	伊藤 日和さん（留萌） 遠別町立遠別中 3年	平尾 萌花さん（渡島） 北斗市立浜分中 3年
大柳 茉耶さん（日高） 浦河町立浦河第一中3年	水上 桜佑さん（檜山） 乙部町立乙部中 3年	嵯城 蓮人さん（釧路） 釧路市立幣舞中 3年	岩山 心咲さん（オホーツク） 斜里町立知床ウトロ中 9年
坂 夢叶さん（札幌） 札幌市立平岸中 2年	矢部 優実さん（石狩） 千歳市立千歳中 3年	久保田翔子さん（後志） 蘭越町立蘭越中 3年	山野 紗璃さん（十勝） 中札内村立中札内中 2年

優秀賞（北海道PTA連合会会長賞）

内崎いおりさん（空知）岩見沢市立明成中学校3年
「人との関わり」

優秀賞（（公財）北海道青少年育成協会会長賞）

笠原 桜空さん（胆振）厚真町立厚南中学校3年
「当たり前」

最優秀賞 （北海道知事賞）

「恨みを愛へ」

下川町立下川中学校3年

みうら
三浦 かなさん



「み…みず！水！」

まただ。また妹がうなされている。5年前、末の妹が保育園の送迎バスに置き去りにされた。何人もの大人が確認を怠り、妹はバスの中でだんだんと意識を失っていった。偶然早く迎えに来た母が気づいたことで、発見された。新聞に掲載されたのは、「命に別条はない」の一文。しかし、別条がないというのはただ生きているというだけで、今までの日常が戻ってくるわけではなかった。

あの日から、私たちの生活は一変した。妹は事故のトラウマで夜中に泣き叫ぶようになった。ひとりでトイレに行けなくなった。村の安全対策に疑問を持ち、私たちは隣町に引っ越すことになった。家族みんなが不安定になり、母から笑顔が消えた。妹は引っ越しのストレスで脱毛症になった。こうなったのは事故のせいだ、不注意な大人のせいだと、私は毎日事故を恨んだ。

当時私はまだ小学生だったが、何とかしたいと強く願った。苦しむ子どもが出ないように、壁新聞を作ったり作文を書いたりして社会に訴えかけた。しかし、当事者になるまでみんな他人事で、誰も耳を傾けてはくれなかった。

そんな時、私たちに転機が訪れた。息子さんを保育中の川の事故で亡くされた方と知り合ったのだ。ライフジャケットさえ着ていれば守れた命だった。その人は、二度と同じような事故が起こらないように、ライフジャケット着用を呼びかける活動をしている。

会う前は、彼女も私と同じように社会を、事故を恨んでいると思っていた。しかし実際に会った彼女は、おだやかで、笑顔がすてきな方だった。

失礼ながら私は「あなたは事故を恨んでいないのですか？」と聞いた。すると彼女はこう言った。

「もちろん、事故のことは憎い。だけど、その恨む気持ちは置いておいて子どもの命を守ることを第一に活動している。」

笑顔を忘れずに、活動を自分自身が楽しむ。そうすると、自然と共感してくれる仲間が増えていくという。

私はその姿に心動かされた。確かに、事故を恨んでいることを訴えても、そこから何も生まれない。関係者への恨みが増すだけで誰もハッピーにはならない。

私達は、それまで抱いてきた事故や社会への恨みを、社会への愛に変えることにした。これ以上苦しむ人がいなくなることが、私達の最大の願いであるということに気づいたからだ。

それから私達は、社会を巻き込んで活動していった。大好きな野生生物の命を守るため、この4年間家族で毎月ゴミを拾っている。水の事故を無くすため、2年かけてライフジャケットレンタルステーションを設置した。

髪がない辛さを知り、妹達と、3回目のヘアードネーションに挑戦中だ。目の前にはいない誰かと繋がっている気がする。こうやって小さいけれど、少しずつ楽しみながら社会を変えていこうと今も活動している。

私が住む下川町は昔、小学生が自転車事故で亡くなったことをきっかけにヘルメット着用を推進している。何十年も前の死が、そのまわりの人々の活動が、今の私たちの命を守っている。私たちは見ず知らずの誰かの愛に支えられて生きているのだ。

意識していなくても、私たちみんなが社会と繋がって社会を作っている。安全な社会を作っていくのは他でもない私たちひとりひとりだ。これからも、立ち上げられない程の苦しみや悲しみを経験することがあるかもしれない。

私は、そんな時こそ恨みに心が占拠されないようにしたい。

過去を恨むのではなく周りへの愛に変えることで、未来はきっと変えられる。